

過去を変えるのは誰か

映画『タイムマシン』劇場用パンフレット解説

青山拓央

『タイムマシン』の原作には、過去を変えるという要素がない。今回の映画化における最大の特徴はここにある。主人公アレクサンダーは、恋人エマの死をきっかけに、タイムマシンの研究に没頭する。彼にとってタイムマシンとは、「過去を変える」ための道具なのだ。

アレクサンダーはタイムトラベルによって、この目的の一部を果たす。エマを強盗による殺害の場所から、遠ざけることに成功したのだ。しかし彼の努力も空しく、エマは不慮の事故死を遂げる。繰り返されるエマの死を前に、アレクサンダーはこんな言葉をつぶやく。

「千回過去に戻れば、千通りの死を？」

この考えが真実ならば、2度目のエマの死は偶然ではない。過去には避けられない運命が、存在していることになる。しかしこうした状況は、納得のいくものではない。ここにはふたつの謎がある。

第1の謎は「変えられる過去」と「変えられない過去」との違いが、何によってもたらされているのか、というものだ。些細な過去と重要な過去とを区別するものは何なのか？ それは歴史全体への影響の違いによるものなのか？

確かにエマの死の影響は、アレクサンダーにとっては極めて大きい。しかしエマが「死ぬ／死なない」よりも、1輪の花が「売れる／売れない」のほうが、歴史全体にとっては大きな違いとなるかもしれない（ブラッドベリのある短編では、1匹の蝶の生死が未来の運命を大きく変える）。だとすれば、なぜアレクサンダーは花を買うことはできても、エマを救うことはできないのか？ 彼にとっての影響の大きさが、特別扱いされる理由はない。

僕がアレクサンダーなら過去でエマを救う以外に、いろいろなことをやってみるだろう。そうして「変えられる過去」と「変えられない過去」との違いを見極めようと努力する。しかし試行錯誤の結果、他のあらゆる出来事は変えることができるのに、エマの死のみが避けられないとしたら、これ以上頭をひねっても無駄である。神様に目をつけられたと思うしかない。

さて第2の謎のほうは、もっとやっかいなものである。アレクサンダーのタイムマシンは、少なくとも過去の一部を改変することができる。しかし「過去を変える」とは、そもそも何をする事なのか。われわれはそのことの意味を、理解できているのだろうか。

アレクサンダーがタイムトラベルによって、エマと再会した場面に注目しよう。アレクサンダ

一は記憶ではなく、現実のエマを抱きしめ、エマと同じ「現在」に生きていることを歓喜する。

しかし一方でこの世界は、アレクサンダーにとって「過去」でもある。映画を観ているわれわれもそのことを理解しているからこそ、この映画をタイムトラベルの映画として楽しむことができるのだ。ではなぜ同じひとつの世界が、現在であると同時に過去である、などということが可能なのか？

その理由は、アレクサンダーの経験の順序が、日付や時刻といった歴史の順序と分離されている点にある。映画のストーリー展開の順序が、アレクサンダーの経験の順序と一致しているために、観客はこの分離を自然に理解することができる。

過去に戻ったアレクサンダーが、強盗によるエマの死を過去の出来事だと見なせるのは、歴史の順序とは独立に、自分自身の経験の順序を理解しているからである。彼が過去に到着したのはエマが強盗に殺されたのより、時刻としては前のことだ。しかし彼の経験においては、過去への到着のほうが後となる。

このふたつの順序の分離は「過去を変える」うえでも不可欠である。ビートルズが録音されたテープに、ショパンを録音する場合を考えてみよう。このとき上書きされたテープには、その事実が残されていない。「このテープには以前、ビートルズが録音されていた」と言うためには、テープの再生順序とは独立の「変更の時間」が必要である。『タイムマシン』ではアレクサンダーの時間経験こそが、この役割を果たしている。

だが以上の説明には、ひとつの大きな疑問が残る。アレクサンダーにとっての「現在」とは何か、というのがそれである。過去へのタイムトラベルに成功し、エマとの再会を果たしたとき、その世界は彼にとって現在の世界でもあった。確かに彼はその世界を、記憶や想像ではなく、目の前の現実としてとらえている。

しかし世界を目の前の現実としてとらえているのは、再会の場面でのアレクサンダーに限られたことではない。全ての時点のアレクサンダーは、「今この瞬間」の世界として、目の前の現実をとらえている。どの瞬間の世界も、その世界の人物にとっては、現在の世界なのである。

タイムトラベルという想像の最大の困難がここにある。時間旅行者が過去に「行く」とき、目的地となる世界は時間旅行者にとって、現在の世界となるはずだ。しかしわれわれは、ある世界が現在になるということの意味を、うまくつかむことができない。

『タイムマシン』のような映画において、このことは極めて重要である。なぜならこの映画の世界では、現在の出来事のみが人間の自由な意志によって「変えられる」もののように描かれているからだ。だからこそアレクサンダーは、自らが過去に行くことで歴史を変えようと試みたのである（過去を過去のまま変えられるのなら、彼は過去に行く必要がない）。

もう一度観客の立場に戻って、アレクサンダーのタイムトラベルを見てみよう。アレクサンダーは過去へと旅立ち、「今まさに」エマと再会する。われわれはごく自然に、このことを理解している。ここには何かからくりがあるはずだ。再会の場面を、現在の世界だと感じさせるためのからくりが。

実はからくりの正体は、すでに明らかにされている。前述の一文にもう一度目を向けてほしい。「映画のストーリー展開の順序が、アレクサンダーの経験の順序と一致している」

これは結局、映画の観客の経験の順序が、アレクサンダーの経験の順序と一致していることを意味している。そしてこの順序の一致は、さらに決定的な一致によって成立している。それは観客にとっての現在と、アレクサンダーにとっての現在との一致である。

われわれはアレクサンダーとエマの再会を「今まさに」目にするすることで、アレクサンダーもまた「今まさに」エマと再会していると考えている。すなわちわれわれは、自らの時間経験を映画に投影することで、タイムトラベルを理解している。もし誰ひとりとして『タイムマシン』を観ていないなら、アレクサンダーは過去に行くことができない。彼が過去を変えるには、われわれの力が必要なのだ。

この事実は、映画に限られたことではない。小説や漫画といった虚構が、タイムトラベルや過去の改変を表現するには、それが「観たり読んだり」されるための、外部の時間を必要とする。カート・ヴォネガットの作品のような例外的なケースもまた、読者に時間旅行者の時間の再構成を強いることで、同じ目的を果たしている。

以上の分析をふまえて虚構から現実へと目を転じるなら、新たなひとつの問題が顔を覗かせていることに気がつくだろう。現実の世界におけるタイムトラベルを想像するとき、その一連の現象はこの世界の外部の何者かによって、「観たり読んだり」される必要があるのだろうか？ それともわれわれはこの世界の内部から出ることなく、タイムトラベルを理解することができるのだろうか？ ここには「時間とは何か」という問いのひとつの変奏が現れている。